

日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現

楊 虹*

Topic Opening Markers in Japanese Native Speakers' Conversations

YANG Hong

abstract

This paper is to specify the topic opening markers by Japanese native speakers. The data consist of eleven audio- and video-taped 20-minute dyadic Japanese conversations. The analysis focused upon a variety of the topic opening markers, their frequency, and correlations between them and types of topic shift. As a result, six kinds of topic opening markers were observed. They function as : 1) making topic conspicuous, 2) showing change of recognition, 3) showing hesitation in speech, 4) connecting, 5) meta-language, and 6) calling names. In order to analyze the tendency of usage in topic opening markers depending on the type of topic shift, all the topic shifts were divided into two types: continuous shift and discontinuous shift. As for the rate of occurrence of topic opening markers, it became clear that more topic opening markers occur in discontinuous shift. As for each topic opening marker, the marker showing change of recognition was only notably higher in discontinuous shift than in continuous shift. No difference was clearly seen in the other topic opening markers. These results show that Japanese speakers use topic opening markers to show their considerations for their counterparts, the uncertainty, and hesitation to introduce a topic by him/herself.

Key words : topic opening marker, the type of topic shift, Japanese native speaker, unacquainted person

1. はじめに

近年、日本語学習者の話題転換に関する研究がなされている(楊 2005、Nakai 2002、木暮 2002)。話題転換は後続話題が導入され、会話の相手により受け入れられて始めて成立するものであり、スムーズな話題導入はスムーズな話題転換、ひいては円滑なコミュニケーションには大切であると言えるが、学習者にとってスムーズな話題導入が難しいと指摘されている。

楊(2005)では、接触場面における中上級日本語学習者がある特定の話題開始表現を多用していることから、学習者にとっての話題の導入の難しさを指摘している。一方Nakai(2002)は、日本語学習者と日本語母語話者の話題開始表現を比較し、日本語母語話者が多用している話題開始表現を学習者が使用していないことを指摘している。学習者の話題開始表現を母語話者のと比較分析するのは問題点を明らかにするのに有効であるが、Nakai(2002)が比較の対象とする母語場面のデータ数が3組と少なく、日本語母語場面での量的使用傾向が明らかになったとは言いきれないと思われる。

キーワード : 話題開始表現、話題転換のタイプ、日本語母語話者、初対面

*平成16年度生 国際日本学専攻

また、木暮 (2002) は、話題を開始する際に用いられる表現を分析した結果、上級学習者でさえこれらの表現の「機能を十分に理解」しておらず、「使いわけができていない」(木暮 2002: 20) と報告したほか、表現形式が正しいのに、不自然な印象を与えるものが見られたことから、話題開始表現と話題の内容との関係からも研究する必要があると指摘している。

これらの研究から、日本語学習者の話題導入の問題点を指摘し、適切な指導を行うためには、日本語母語場面での話題開始表現の使用傾向をまず明らかにすることが必要である。また、その際に、話題開始表現と導入される話題の内容との関連、すなわち先行話題と後続話題のつながり方により、話題開始表現の使用傾向がどう変わるかについても明らかにする必要がある。しかし、現時点で日本語母語場面における話題開始表現の量的使用傾向に焦点を当て、さらに話題間の関連性による話題開始表現の使用に言及した研究は極わずかであり¹、実態解明にはまだ程遠い。本研究は、導入される話題間の関連性を踏まえて話題開始表現の使用傾向を考察する。

2. 先行研究

2.1 話題開始表現の位置づけ

話題開始表現とは話題の開始部に現れる言語表現である。

日本語の会話における話題転換に現れる言語・非言語要素に関する研究にメイナード (1993)、山本 (2003)、村上・熊取谷 (1995) などがあり、それぞれが話題転換に見られる言語・非言語要素を「転換ストラテジー」、「転換マーカ―」、「結束性表示行動」と捉えている。メイナード (1993) は「転換ストラテジー」を「転換を示すヒント」と定義している。メイナード (1993) であげられている「転換ストラテジー」には、先行話題を終了させるものと、後続話題を開始するものを含むが、明示的に分けてはいない。また、山本 (2003) では「話題転換を合図する表現」としてあげられた話題転換マーカ―は主に後続話題を開始させるための言語表現を指していると思われる。

一方、村上・熊取谷 (1995: 105) は、話題転換行動には、先行話題の終了と後続話題の開始という二つの言語行動を含むと捉え、話題転換に現れた言語・非言語要素を話題間の結束性表示行動として捉えている。本研究は、村上・熊取谷 (1995) の立場と同様に、話題転換を開始・終了に分けられると考え、また、話題の開始部における言語表現の解明を目指すという目的から、話題開始表現という用語を用いる。

2.2 話題開始表現の分類

話題を開始する役目を果たすものについては、研究によって、指摘する項目は異なる。ここで主な話題転換研究であげられている話題開始を示す要素を見てみよう。

メイナード (1993): 「転換を示唆する文副詞²・接続詞等」

山本 (2003): 「談話標識 (接続詞、間投詞、副詞)」、「呼称」、「メタ発話」、
「説明の機能を担う疑問文」

村上・熊取谷 (1995): 「認識の変化を示すことば」、「相手に働きかけることば」、「談話標識やメタ表現による談話展開の示唆」、「後続トピックのフレームの提示 (時間、場所等)」、「韻律的特徴の変化」「動作の変化」

これらの研究で上げられている開始表現を見ると、まず「談話標識」、「接続詞」、「メタ発話」、「呼称」等は複数の研究において日本語母語場面で見られる開始表現として指摘されていることが分かる。しかし研究によって、それぞれの開始表現の定義の範囲が異なり、話題開始表現の全体像が捉えにくい。「談話標識」を例に言えば、村上・熊取谷 (1995) の「談話標識」は接続詞を指すが、山本 (2003) の「談話標識」には、村上・熊取谷 (1995) では「認識の変化を示すことば」に分類されるものや、「相手に働きかけることば」に分類されるものも入っている。

これらの研究のうち、話題開始表現の量的使用傾向を分析したのは山本 (2003) である。山本 (2003) では、話題転換において、談話標識の生起数が他の表現と比較して圧倒的に多かったという結果が見られ、談話標識が話題転換において非常に重要な役割を果たしていることが分かった。しかし、話題開始表現が談話標識に極端に集中しているということは、異なる働きをする要素が一つにくくられている可能性も考えられよう。本研究は、話題開始表現のそれぞれの働きをより明確にするため、これらの先行研究より細かく分類して分析を行う。

2.3 話題開始表現と話題転換のタイプ

前節では、日本語会話における話題開始表現に関する研究を簡単に述べてきた。これらの研究のうち、村上・熊取谷(1995)、山本(2003)は話題転換表現と、後続話題と先行話題との関連性、すなわち話題転換のタイプとの関係にも注目して分析しており、話題開始表現の使用は、話題転換のタイプによって異なると指摘している。

日本語における話題転換についての研究の中で、話題転換のタイプに言及したのは南(1981)、村上・熊取谷(1995)、山本(2003)である。南(1981)と山本(2003)は話題転換をまず連続と非連続(南1981は「断絶」)に2分類し、それぞれさらに下位分類を行っている。村上・熊取谷(1995)は派生型、新出型、再生型という3つに分類した。派生型は連続に相当し、新出型と再生型はともに直前の話題に内容的つながりのない話題で、非連続の下位分類に相当する。

そして、話題転換のタイプによる話題開始表現の使用状況について、村上・熊取谷(1995)は、話題間の結束性の強弱が派生型 > 再生型 > 新出型となっており、結束性が弱い転換には「認識の変化を示すことばやメタ表現の使用」「後続話題のフレームの提示」という特徴があり、結束性の強い転換には「話題の前後関係を示す談話標識の使用」という特徴が見られると指摘しているが、量的分析に基づいているものではない。一方山本(2003)では、各転換のタイプにおける話題開始表現総数の生起頻度を分析したところ、上位レベルの分類において、非連続型での生起頻度は連続型より高い。具体的な表現を見ると、談話標識の生起数が最も多く、しかもすべてのタイプに使われているが、メタ発話は主に非連続型に用いられることが分かった。一方、下位レベルでの転換のタイプ(新出型・再生型)による話題開始表現の生起頻度には、はっきりとした差は認められなかった。

これらの結果から、本研究は隣接する二つの話題間の内容的つながりの有無が話題開始表現の使用にもっとも影響する要素と推測し、話題転換のタイプを連続型と非連続型に分けて分析する。

3. 研究課題

本研究は日本語母語話者の初対面の会話における話題開始表現の使用を明らかにすることを目的とし、以下二つの課題を設け、分析を行った。

課題1) どのような話題開始表現が見られるか。

課題2) 話題転換のタイプによって、話題開始表現の使用に相違が見られるか。

4. 研究方法

4.1 データ

話題転換のし方は会話参加者の人間関係に大きく影響されると考えられる。本研究は、量的使用傾向を見るために、会話参加者の人間関係などの条件が統制された会話を集めて分析する必要があると考え、初対面の2者間会話を対象とした。

合計11組の録音・録画データは2004年11月から12月にかけて、某国立大学内で収集したものである。会話の参加者は20代の女子大学(院)生である。参加者には、「自由にしゃべってください」という指示のみで、研究目的は明かさなかった。また、収録時、調査者は席をはずした。冒頭から20分までの会話をデータとし、会話参加者22人にJ1～J22までの通し番号をつけた。

4.2 分析方法

課題1) については、まず、内容のまとまりを持つ発話連続を一つの話題として区分した。

次に、話題開始部に見られる話題開始表現を抽出し、分類を行った。

課題2) については、まず話題転換のタイプを連続型と非連続型に分類した。

分類の基準は以下の通りである。

連続型: 導入された話題が直前の話題と内容上のつながりを持つ、または直前の発話に関連する場合。

非連続型: 導入された話題が直前の話題及び直前の発話と直接のつながりを持たない場合。

下記2つの会話例はそれぞれ連続型と非連続型の転換例である。「→」で示した発話から、話題が変わっている。会話例1は、話題はJ9の「大学院生だからサークルの勧誘がなかった」から、「大学院生に見えないJ9の見た目の若さ」という話題へと転換した。後続話題は直前の発話から引き出されるもので、2つの話題間につながりがあると判断される。

会話例1³ 連続型転換

- 373J9 それでね、全然くれないの。### みたいな。
 374J10 (笑い) 分かるんですかね。
 375J9 そんな。多分あのお袋の色が違って。
 376J10 あー
 377J9 ていうふうに住きたいけど。(笑い)
 → 378J10 いやいやいや、私別に一年生かと思いましたけど。
 379J9 いやだ、いやだ、嬉しい。
 380J10 本当本当。院なんですかと思いましたもん。

一方、会話例2は非連続型転換の例である。話題はJ9の「学祭で踊ること」から、J10が「学部から上がってきたのかどうか」という話題へと転換した。後続話題は直前の話題や発話とのつながりがないと判断される。

会話例2 非連続型転換

- 44J9 今ちょうど練習やってて。
 45J10 もうすぐですよ、だって。
 46J9 もうすぐです。来週の土曜日かな、やって。
 47J10 うん。
 48J9 ° #### います°。
 → 49J9 ずっと〇〇大にいて、院に入ったんですか。急に話変えて。
 50J10 えっと、あの私は受験したので、別の大学からで。

なお、話題の区分及び転換のタイプの認定については、日本語母語話者の協力を得て、3割の分析資料について一致率を出した。その結果、話題の区分の一致率は85%で、転換のタイプの認定の一致率は91%であった。

そして、上記の連続型と非連続型に分類された話題の開始部に用いられる話題開始表現を分類・集計し、それぞれの転換のタイプにおける各話題開始表現の生起率を算出した。

5. 結果と考察

5.1 課題1. 話題開始表現の種類

分析の結果、話題開始部においては、下記6種類の話題開始表現が見られた。

1) 話題となる事柄を際立たせる表現

話題となる事柄を際立たせる表現は、さらに下記3つの下位分類ができる。

① 提題表現

話題となる事柄の後に「は」「さー」を伴う場合。

例：え、ロシア語はしゃべれますか。

例：教職さー、教職体育まだ取っていないよねー。

② 列挙、自己引用表現

話題となる事柄の後に「とか」「って」「ていうか」「とか言って」を伴う場合。これらの表現を伴うことにより、話題となる事柄を目立たせると同時に、その方向は大まかな方向性であることを示す⁴。

例：サークルとかやっていますか。

③ くり返し・倒置表現

話題となる事柄をくり返したり、倒置させたりすることにより、より目立たせる効果を持つ。

例：寮、寮からですか。寮に住んでいますか。

例：やったんですか、サークルとか。

2) 認識の変化を示す表現

話し手の認識の変化を示す「え」「あ」のような感動詞または表現。

「え」「あ」のような感動詞は話し手の内部の情報処理状態の表れで、これらを音声にして発することで、その2次的な働きとして、相手に話の内容の方向性を察知する手がかりを与えるという（田窪・金水 1997）。また、次のような話者の情報処理状態を具体的な表現で示したのも見られた。

例：あ、あ、〇〇祭か。思い出しちゃいました。〇〇祭近いんだ。

3) 言いよどみ表現

「あのう」「なんか」のような会話の展開等を示す手がかりとなる表現である。

例：なんか、論文ってなんか最大難関ですよ。

本研究で見られた言いよどみ表現は主に「なんか」である。話し手が現在発話の内容または言語表現を考えていることを示す言いよどみ表現「あのう」（定延・田窪 1995）と比べ、「なんか」は「だいたいこんな感じ」という本質的に不確実性・不特性を持つことば（鈴木 2000）であり、つなぎのことばであると同時に、話題の導入に一種のあいまい性を相手に感じさせる役割を持つ。

4) 接続表現

「それで」「でも」等先行話題とのつながりを示す表現である。佐久間（1990）は接続表現の談話展開機能による分類では、「それでは」「で」「じゃ」「さて」は話題を開始する機能を有するとした。本研究では話題転換において「でも」という接続詞しか見られなかった。

5) メタ言語表現

話題として取り上げられることを示す表現である。メタ言語の機能の一つは「話題の提示」であり（西條 1999）、相手の注意を喚起し、いきなり本論に入るのを避けるために用いられると考えられる。

例：全然話変わっちゃうんですけど、〇〇先生って。

6) 呼びかけ表現

相手の名前（「〇〇さん」）、または相手の注目を要求する感動詞を呼びかけとして用いる場合である。前原（2000）は「談話冒頭であるかのような効果を目指した話し手の意図」を反映し、内容が転換していることを示す手がかりとなると指摘している。

5.2 課題2. 転換のタイプ別にみた話題開始表現の生起率

本研究では全部で91回の話題転換が見られ、そのうち、連続型転換は61回で、非連続型転換は30回だった。61回の連続型転換では、合計67の話題開始表現が見られ、30回の非連続型転換では、合計37の話題開始表現が見られ、平均して一回の話題転換には、1つ以上の話題開始表現が用いられることが分かった。話題転換のタイプによるその使用に大差は見られなかったものの、非連続転換に用いられる話題開始表現の使用頻度が比較的高かった。また、具体的に各ストラテジーの生起率を見ると、転換のタイプに関わらず、話題開始表現の使用傾向はほぼ同じである（図1参照）。

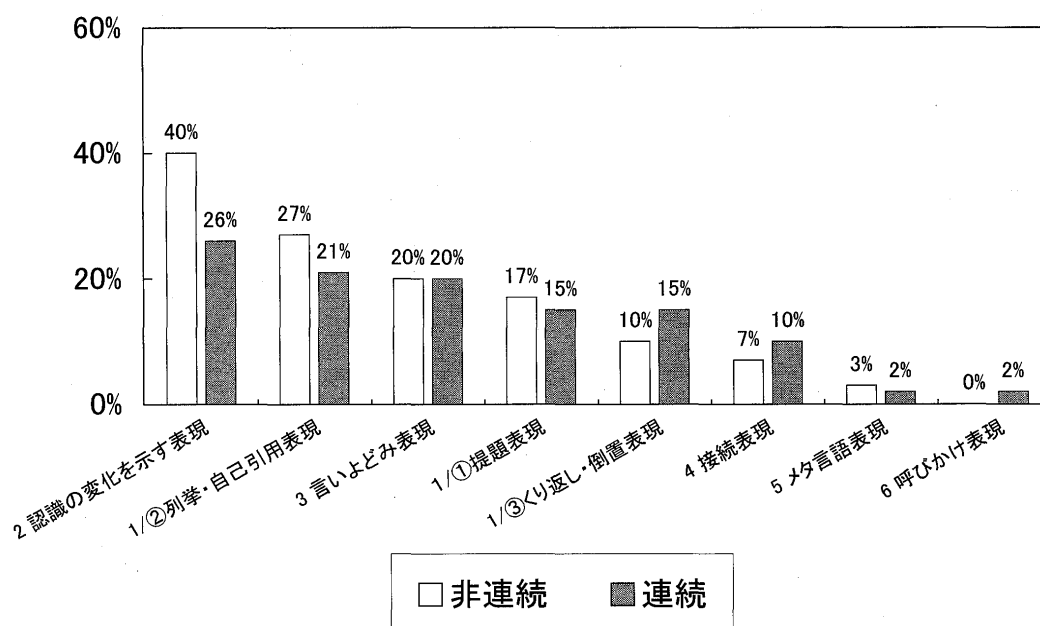


図1 転換のタイプ別の話題開始表現の生起率

図1からは、以下の3点が読み取れる。1. 非連続型と連続型による生起率の差は、認識の変化を示す表現において最も顕著である。2. 列挙・自己引用表現や、言いよどみ表現、提題表現、くり返し・倒置表現の生起率はいずれも10%を上回っているが、転換のタイプによる差は見られない。3. 接続表現、メタ言語表現、呼びかけ表現はそれほど使用されていない。

次節では、以上の3点を中心に日本語会話における話題開始表現の役割を考察する。

5.2.1 非連続型転換での生起率が高い話題開始表現

認識の変化を示す表現は両タイプとも生起率が高かったが、非連続型での生起率が連続型より14%も高かった。本研究で見られる認識の変化を示す表現は「え」、「あ」、「あ、そっか」と「あ、思い出しちゃいました」である。これらの表現はいずれも「話し手の内部の情報処理状態の現れ」であり、「これらを音声にして発するのは相手に自分の内部処理状態を知らせる役目を果たさせる」(田窪・金水1997:261)。

本研究では全部で28の認識の変化を示す表現のうち、22回が「え」である。田窪・金水(前出)では、「ねえ、買ったよ」「え、買ったって、何を買ったの」を例に、「え」は「内容が矛盾したり、関連性が低かったり」する発話に対する反応を示す機能を持つと分析している。

本研究では、「え」はこれからの発話が先行話題と関連性が低い、または全く関連しない話題導入の先導として用いられるものが見られた。会話例3では、二人はJ18の第二外国語(ドイツ語)の勉強について話している。J18の「ドイツ語の分かるお母さんにいつも教えてもらっている」という発話から、J17は会話の焦点を「お母さんがどこにいるか」に移し、さらにその後すぐ「J18の実家」に話題を変えた。「え」はJ17の内部の情報操作のプロセスの現れであり、つまり224の「え」は、お母さん・家という情報に触発されて生まれた新たな疑問であり、全く関連しないものではないとはいえ、それまでの話題全体の流れとは異なる方向に思考が向いていることを表している。そして、聞き手にとって「え」は話題転換を認識する手がかりの一つとして利用できる。

会話例3

221J17 ドイツ語。お母さんに聞けばいいもんね、そうだよ。

222J18 そう。なんか問題の授業の日は自分で解いて、うんと、コピーしてファクスを家に送って、答えを教えてもらって。とかやって。

223J17 へー

- 224J17 え、お母さんどこに住んで、実家はどっちの出身。
225J18 あー、実家は〇〇で。

また、会話例4では、話題は社会学と心理学に関するものからJ10の個人の生活に関する話題に移った。寮の話はここでは初出で、それまでの発話を見る限り、先行発話に触発されたことによる発話とは考えにくい。このような先行話題との関連性がない非連続型転換においても、「え」の使用が多く見られた。非連続型話題の導入に「え」を使うことによって、聞き手にあたかも導入される話題が前の話題となんらかの関連性を持つかのような印象を与える。

会話例4

- 143J10 心理学って全然違う、全然じゃないけど、心理学ってまた違う。
(中略)
148J9 でも好きならそっちもやってみて、うん、私も心理とかちょっと、学部の授業で取ったりしたので。
149J10 そうなんですね。
150J9 うん、うん。
151J10 うーん
152J9 えー、そうなんだ。(笑い)
153J10 そうなんです。
→ 154J9 え、でも寮、寮からですか。寮に住んでいますか。
155J10 そうです。学生会館です。あのう、〇〇大の寮じゃなくて。

本研究では、非連続型の2倍以上の連続型話題の導入が見られたため、日本語母語話者は、会話の流れと全く関連しない非連続型話題の導入を進んで行っているとは言えない。そして、たとえ非連続型転換であっても、「え」を使用することにより、あたかもそれまでの会話に連続しているような錯覚を与えることができる。これが本研究で非連続型転換に認識の変化を示す表現が最も多く用いられることの一因ではないかと推測する。

5.2.2 転換のタイプによる差がはっきりしない話題開始表現

転換のタイプによる差がはっきりしない話題開始表現は、列挙・自己引用表現、言いよどみ表現、提題表現、くり返し・倒置表現である。これらの話題開始表現は、生起率が20%台から10%台であり、導入される事柄を際立たせる働きを持つものと、話題導入という行為に対する躊躇を示す働きを持つものと、この両方の働きを持つものがある。

列挙・引用表現はこの両方の働きを持つ。「とか」「って」のような表現は話題となる事柄そのものを明示的に提示してはいるが、それはあくまでもこれから話題となりえるものの一例に過ぎないという話し手の気持ち⁵を表し、話題導入という発話効力を弱める効果を持つ。

会話例5ではJ7は「サークルとか入っていない？」という発話で話題を導入したが、ここで、「とか」を用いることによって、相手の反応を窺いながら話題の導入を行っていることが窺われる。そしてJ8から肯定の返答を得てから、J7は単刀直入に次の質問を投げかけた(103J7)。

会話例5

- 98J7 宿題って出た。
99J8 あ、出た。やっていない。(笑い)
100J7 やりたくない。(笑い)
→ 101J7 サークルとか入っていない？
102J8 あー、サークル入っているよ。
103J7 何に入っている？

また、言いよどみ表現は話題導入という行為に対する躊躇を示す働きを持つと考えられる。これから言いたいことを考えたりしている時のつなぎ言葉であり、話題導入にあたり、適切な表現が見つかるまでのターン保持の談話管理機能があると指摘されている（田窪・金水 1997）。また、「なんか」に関しては、鈴木（2000）は「なんか」は本質的に「不確かさ」を持つ言葉で、話題導入の機能を含む複数の働きを持つ表現であると指摘している。本研究では言いよどみ表現として圧倒的に多かった「なんか」には、話題の導入における話し手の不確かな気持ちを相手に伝える機能が見られた。これは「とか」「って」などと同じく、話題導入という会話の流れを変える行動を緩和する働きを持つものとする。

一方で、提題表現や、くり返し・倒置表現は主に話題を際立たせる表現であり、話題となる事柄を明示的に示すことによって、会話の相手の理解に配慮する働きをする。

5.2.3 転換のタイプに関わらず生起率が低い話題開始表現

最後に、転換のタイプに関わらず生起率が比較的低い話題開始表現「接続表現」「メタ言語表現」「呼びかけ表現」について述べたい。これらの表現は多くの先行研究によって話題転換表現であると指摘されている。しかし同時に、「堅い言語事象にのみ生起する」（Stubbs 1983）という指摘も見られる。日本語による日常会話等非フォーマルな場面においては、これらの表現が実際に用いられるかどうか、また用いられるとしたら、どのような頻度で用いられているか等については、まだ明らかにされていない。本研究では、初対面の会話とはいえ、非フォーマルな自由会話であること、会話の参加者が大学生であり、年齢や地位にさほど違いがないことが結果に影響していると考えられる。

「メタ言語表現」と「呼びかけ表現」はほとんど見られなかったが、接続表現については、従来話題転換に見られる接続表現として指摘されているものと異なる傾向が見られた。今までは「じゃ」「ところで」「さて」等の接続詞が話題転換機能を持つ表現として分類されている（佐久間 1990）が、本研究で見られた接続表現は「でも」のみである。

「でも」は、従来「論理的な結合関係」を表し、「反対、単純な逆説」機能を持つ接続詞として分類されている（市川 1978）。一方、林（1999）は複数の話題移行の管理における「でも」の役割を分析し、「でも」は初回言及の情報導入や、前出の話題を再度言及する先導としての役割を持つと指摘している⁶。

しかし、本研究で見られた前出の会話例4のような非連続型転換における「でも」は、それまでの内容への反応というより、むしろそれまでの会話の流れ全体に無関係な話題の導入を示している。会話例4では、寮に関する話題は初出であるが、「え」とともに「でも」という接続詞が用いられることにより、この話題はあたかもそれまでの会話に関連するかの印象を与える。

もちろん連続型転換においては、「でも」本来の「逆接」の用法も見られる。しかし会話例4のような論理的関係をほとんど示さない「でも」の談話機能については、これまで指摘されていないため、日本語学習者にとっては、分かりにくい表現ではないだろうか。

6. まとめ

本研究は日本語母語話者の初対面会話の話題転換における話題開始表現の種類及び生起率を分析し、さらに、話題間の関連性、すなわち話題転換のタイプにより、その生起にどのような傾向が見られるかを分析した。

分析の結果、「話題を際立たせる表現」「認識の変化を示す表現」「言いよどみ表現」「接続表現」「メタ言語表現」「呼びかけ表現」という6種類の話題開始表現が見られた。話題転換のタイプについては、全話題転換のうち3分の2以上の話題転換は先行話題と関連性のある連続型転換であることが分かり、またタイプによる話題開始表現の生起率では、非連続型転換にはより多くの話題開始表現が生起するということが明らかになった。

各話題開始表現の生起率及びそれぞれの役割を分析した結果、非連続型転換において、話題開始表現が顕著に高いのは認識の変化を示す表現のみである。その他の話題開始表現でははっきりとした差が見られなかった。そして、日本語母語話者による話題導入には、以下の3つの特徴が見られた。第1に、認識の変化を示す感動詞の多用から、話題の導入者は相手が会話の流れをすばやく掴むことができるように配慮すると同時に、先行話題と

関連しない話題の導入にも関連づけようとしているという特徴が見られた。第2に、列挙・自己引用表現や言いよどみ表現の多用から、話題の導入者は話題となる事柄を際立たせることにより、相手の会話理解に対する配慮を示すと同時に、話題導入そのものに対する不確かさ・躊躇も示すことにより、相手の反応を窺いながら話題導入を行うという特徴が見られた。第3に、これまでの先行研究で言及されることの多い接続詞やメタ言語表現の生起率は非常に低く、また呼びかけ表現のような話題開始表現はほとんど使用されないことが分かった。

本研究は話題開始表現を細かく分類し、さらに話題間の関連性によるこれらの表現の使用傾向を分析したことにより、これまで話題を開始する役割を持つ表現として、一くりにされたもののそれぞれの働きを明らかにした。例えば山本(2003)などで談話標識に分類されているものに、極めて頻繁に用いられる認識の変化を示す感動詞とそれほど用いられない接続詞では、その生起頻度、機能及び生起環境が異なることが明らかになった。また、日本語母語話者は、会話の流れを大きく変える際、それまでの話題と関連しない話題をあたかも関連するように見せかけたり、話題導入の発話効力を下げたりする表現を用いることが明らかになった一方、メタ言語表現や呼びかけ表現といった話題導入を明示的に示すものは、発話効力が強い初対面の自由会話では、避けられる傾向があるということも示唆された。

本研究で得られた結果は女子大学生のみを対象としているという制約があるため、一般化するには限界がある。しかし、上記のような日本語母語話者の話題導入の特徴は、日本語学習者との接触場面での研究の基礎的な研究になるだろう。今後は話題転換における話題終了の分析を行いたい。

付 記

本研究は「第30回日本言語文化学会」でのポスター発表をもとに加筆・修正したものである。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、佐々木泰子先生に多くのご助言を頂きました。また査読者の方には、多くの有益なご指摘をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

註

1. 山本(2003)はテレビのトーク番組における話題転換表現の量的分析を行っている。
2. 「～と言えば」のようなメタ言語表現を指す。
3. 本研究の主な文字化規則は以下の通りである。Jの前の番号は発話番号である。本研究はターンを基本単位に文字化資料を作成しているが、話題の終了部と開始部を明示するために、同じターンに終了発話と開始発話を含む場合、それを分けて番号を振って示している。()は非言語行動を示す。° °で囲う発話は小声で発されるものを示す。#は聞き取れない発話を示す。○は固有名詞等プライバシーに関わるものである。
4. 「って」「ていうか」のような自己引用は、発話行為の軽減、強調、躊躇を伝える機能を持つと指摘されている(メイナード2004)。「とか」は「事物の列挙という具体的かつ明確な性質とあいまい性、不確かさという不明瞭な性質が共存する」ものである(砂川2000)。
5. 辻(1999)は若者は「とか」「ていうか」等の不特定化表現の使用によって、話し手が聞き手に対して負う責任を軽減する傾向があると指摘している。
6. ただし、林(1999)は会話における「でも」は関連を表す「照応の絆」であると述べており、初出の話題でも先行話題と関連があるものであると言える。

参考文献

- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版。
 木暮律子(2002)日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について『第二言語としての日本語の習得研究』5, 5-23。
 西條美紀(1999)『談話におけるメタ言語の役割』風間書房。

楊 日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現

- 佐久間まゆみ (1990) 「接続表現の機能と分類」『日本シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」』16-25.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(-)」—『言語研究』108, 74-93.
- 鈴木佳奈 (2000) 「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学会』9, 63-78.
- 砂川千穂 (2000) 「日本語における「とか」の文法化について—並立助詞から引用マーカーへ—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』9, 61-73.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版, 257-278.
- 辻大介 (1999) 「「とか」弁のコミュニケーション心理」『第3回社会言語科学会研究大会予稿集』9-24.
- 林淑璋 (1999) 「談話の一貫性と話題展開—「でも」と言う談話標識を用いた会話分析—」『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』123-128.
- 前原かおる (2000) 「呼びかけの特徴—題目との接近可能性—」『広島大学日本語教育学科紀要』10, 57-64.
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として—」『藤原与一先生古希記念論集「方言学論叢」』三省堂, 7-112.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- メイナード, K. 泉子. (1993) 『会話分析』くろしお出版.
- メイナード, K. 泉子. (2004) 『談話言語学』くろしお出版.
- 山本綾 (2003) 「話題転換についての—考察—アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として—」『えちゅーど』33, 57-81, お茶の水女子大学大学院英文学会.
- 楊虹 (2005) 「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』30, 31-40.
- Nakai, Y. (2002) Topic Shifting Devices Used By Supporting Participants in Native/Native and Native/Non-native Japanese Conversations, *Japanese Language and Literature*, 36, 1-26.
- Stubbs, M (1983) *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Oxford: blackwell. 南出康生・内田聖二訳 (1989), KENKYUSHA.

(2006年1月10日受理)